

解説

# 瑞穂市の浸水対策の取組み

くどう ひろあき  
工藤 浩昭

瑞穂市  
環境水道部下水道課長

## 1 はじめに

瑞穂市は、濃尾平野の北西に位置し、東は県都の岐阜市と西は産業都市大垣市との間にあり、市の東には清流長良川、西には揖斐川が流れ、輪中と呼ばれる水郷地帯で、古くから水害に悩まされてきました。江戸時代には五街道のひとつの中山道が通り、宿場も置か

れていました。現代においてもJR東海道本線を利用し名古屋まで25分、新幹線を利用して東京まで2時間20分、大阪まで1時間40分の交通至便の地となっています。

人口約5万5千人の小さなまちですが、岐阜県においては、近年、人口増加数、人口増加率ともに1位であり、平均年齢も一番若く、国立社会保障・人口問題研究所の推計では、今後も人口増加が見込まれており、ここ十数年は急激な宅地化が進んでいます（図-1）。



図-1 瑞穂市の位置図

## 2 浸水被害の歴史

当地は、複数の河川が合流する河川氾濫地域であったことから、江戸時代以前から大きな水害をたびたび受けてきました。戦後、記録に残る大きな水害として、昭和28年、昭和36年に2回、昭和49年、昭和51年と大規模な床上浸水の被害が記録されています。その中でも、昭和51年の台風17号の影響による9月8日から断続的に降り続いた雨では、美濃地方を中心に集中豪雨となって、岐阜県史上最悪の水害となりました。長良川流域一帯が浸水し、9.12豪雨災害として今日まで語り継がれています（写真-1）。当市近くの観測所でも総雨量824mmを記録しました。本市の被災としては、河川氾濫による水害は発生しなかったものの、内水氾濫により市街地の多くが床上浸水となり、災害救助法に基づき自衛隊が出動するほどの大きな被害を受け、激甚災

害にも指定され、現在の本市の浸水対策の基となる水害となっています。

近年では、気候変動により毎年のように局所的な短時間豪雨が発生し、写真-2のような市街地の道路冠水が起こっており、公共下水道の雨水施設整備による浸水対策のニーズが高まっています。



写真-1 市内の9.12豪雨災害（1975年）



写真-2 道路冠水の状況（2013年）

五六川や起証田川の河道改修（写真-3）が現在実施され、また、これに合わせて牛牧排水機場の移転および増強工事が、国土交通省中部地方整備局木曾川上流河川事務所によって行われております。この整備により市内の内水排除能力の向上が期待されています。

表-1 排水機場一覧

名称	設置者	ポンプ排水能力
犀川統合排水機場	国土交通省	10.0m <sup>3</sup> /s×1台 4.2m <sup>3</sup> ×2台
犀川第3排水機場	国土交通省	10.0m <sup>3</sup> /s×3台 2.5m <sup>3</sup> ×2台
天王川・糸貫川排水機場	国土交通省	8.0m <sup>3</sup> /s×4台 8.0m <sup>3</sup> /s×3台
宝江川排水場	国土交通省	1.5m <sup>3</sup> /s×2台
平野井川排水機場 柳瀬排水機場	国土交通省 土地改良区	3.0m <sup>3</sup> /s×1台 4.94m <sup>3</sup> /s×2台
花塚排水機場	瑞穂市	1.35m <sup>3</sup> /s×2台
別府排水機場	瑞穂市	0.7m <sup>3</sup> /s×2台
牛牧排水機場	瑞穂市	1.5m <sup>3</sup> /s×2台



写真-3 犀川遊水地事業での河川整備（2021年）

### 3 雨水対策事業

#### 3.1 河川整備での取組み

本市は、面積28.19km<sup>2</sup>の中に18本の一級河川があり、これまでの雨水対策は、輪中地帯の特徴である堤防に囲まれた地形であることから、排水機場による雨水対策からはじまりました。戦後まもない昭和26年に最初の犀川第一排水機場が完成し、現在、市内には表-1のような河川排水機場が5箇所、湛水防除の排水場が4箇所、計9箇所の排水機場があります。

また、市内南部の犀川では230万m<sup>3</sup>の貯水能力をもった犀川遊水地事業が行われ、この遊水地事業に伴い

#### 3.2 下水道事業での取組み

また、下水道事業による雨水施設は昭和46年から平成2年の20年間をかけて表-2のような4つの都市下水路458haの整備を行ってきました。

表-2 都市下水路一覧

名称	延長 (m)	排水面積 (ha)
牛牧都市下水路	3,770	218
別府都市下水路	3,350	97
只越都市下水路	790	37
穂積都市下水路	2,890	106